

東寺の概略

東寺は京都で最も古い佛教寺院である。桓武天皇（735-806）の下、都が建造されてからわずか2年後の796年に建てられた。東寺は朝廷、新たな都、そして国全体にスピリチュアルな保護をもたらすために建てられた。当時、東寺は都の内側で許可を受けたたった2つの寺のうちの1つだった。“東寺”の文字通り、東寺は当時の都の正面玄関の東側にある。もう一つの寺、西寺は1233年に焼失し、再建されなかった。

東寺は、死後は弘法大師（佛教の教義の大師の意）として知られるようになった有名な学者であり、建築家であり、能筆家であった僧空海（774-835）と密接に結びついている。空海は遣唐使の一員として804年に中国を訪れ、唐王朝（618-907）の支配下でインドから中国まで広まっていた密教の教義と儀式を研究した。密教は佛教の世界の宇宙を視覚的に描いたものである曼荼羅を巧みに使用することで知られる。曼荼羅は絵画、仏像の配置、建物など、東寺のいたるところで見ることができる。

空海は806年に帰国し、中国で学んだことを教え始めた。823年、嵯峨天皇（786-842）は東寺を空海に下賜し別当に任じた。この時期までに彼の教義を真言宗という密教にしていた。空海は、真言宗だけが東寺で修行されることを条件にそのポストを受け入れた。これは、同じ寺院で複数の宗派が学ばれていた当時の一般的な慣行からの大胆な脱却であった。彼は別当として寺を改革し、講堂や五重塔などを含めた新しい建物を建てて拡大した。

京都の町と同様に、東寺も1200年以上にわたって火災、地震、戦争、その他の災害を乗り越えてきた。建物の多くは、一度ならず何度も再建された。1486年に壊滅的な火災が建物施設を襲い、その後1世紀以上にわたる内戦により、修理の努力が妨げられた。東寺の建物のほとんどは、1400年代後半から1600年中期の建築になる。5つの建造物は、同寺の宗教的芸術作品の多くと同様に国宝に指定されている。ユネスコは、1994年に古代京都の歴史的建造物の一部として、東寺を世界遺産に指定した。